地域経済における「稼ぐ力」としての農業

札幌学院大学 経済学部 准教授　佐々木　達

1　はじめに

日本農業は、国土が南北に長く、季節性を有し、多種多様な農畜産物を生産できるという豊かな地域性を保持しているところに一つの特徴がある。こうした多様な自然条件とその上に展開された社会経済的条件が、各地域に特色ある農業を形作ってきた。そして、もう一つの特徴は、規模拡大や効率化を通じた土地利用型農業による労働生産性が高い地域とブランド化や高品質化による付加価値化に代表される集約型農業による土地生産性が高い地域とが併存しており、農業生産性も多面的な評価ができることにある。

日本農業は、国際競争力に乏しいことや国内市場が縮小傾向にあるという理由から構造改革の必要性が謳われているが、地域的多様性という利点をどのように活かして各地域の農業生産力を引き上げていくのかという問題の立て方が今後の農業再建にとって重要な視点になってくると思われる。本稿では、経済基盤モデルを地域農業に応用することで、「外」で稼ぐ農業と「内」で稼ぐ農業の両輪によって、地域経済を維持ないし成長させる可能性を、北海道十勝地方の大規模畑作地域である音更町の事例を手がかりに論じてみたい。

2　地域経済の基盤産業としての農業

北海道は全国平均よりも速いペースで人口が減少すると予測されている。しかも、人口減少の影響は都市部よりも地方圏、とくに農村部の方が大きいと見られている。人口動向は、地域の経済社会の運営にとって最も基本的な指標であることから、人口をどのように地域に維持・定着させるかは地域経済を維持ないし成長させていく上で重要な課題となっている。他方、農業構造から見れば、北海道のように外延的な規模拡大を進めてきた地域では、担い手が離農者の受け皿として農地を吸収することで効率的な営農体制を確立してきた。ただし、離農者が地域から流出する場合は、地域経済の衰退に歯止めはかからなくなる。北海道では、農業構造の再編と地域経済の成長とが必ずしも直結しないところに問題の難しさがある。

ところで、人口を維持するためには、所得を生み出す産業が地域内に形成されていること、および雇用を確保できる産業が存在していること、これら両者の連関によって地域経済の再生産構造ないしは循環構造が成立しているかが重要になる。このことを経済基盤モデルから見ると、地域外から所得を獲得する基盤産業と地域内で所得を循環させる非基盤産業の二つに分けて考えることができる。前者は、農林水産業がその代表格であり、移出産業とも呼ばれるように所得を獲得する産業を指す。後者は、小売店や飲食店、不動産業などのサービス事業が該当し、域内需要を前提としながら雇用を吸収する産業を指す。理論的には、基盤産業の規模が非基盤産業を規定すると言われている。北海道の場合、基盤産業としての農業がどの程度外貨を稼ぐ競争力があり、そして雇用の波及効果を創出できるかを考えることが重要である。

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

第1表 音更町民の地場産農産物の購買意欲と食と農への関心

（単位　上段：度数、下段：%）

		音更町の食や農への関心を持ってもらうために必要なこと							
		合計	食育・農業体験の推進	産直市場の拡大	生産者との交流促進	特産品の開発	栽培履歴・方法の表示	その他	無回答
音更町産農産物の購買意欲	全体	380 100.0	42 11.1	200 52.6	24 6.3	34 8.9	21 5.5	21 5.5	38 10.0
	強く、そう思う	99 100.0	14 14.1	51 51.5	10 10.1	6 6.1	6 6.1	6 6.1	6 6.1
	そう思う	252 100.0	25 9.9	143 56.7	11 4.4	23 9.1	14 5.6	12 4.8	24 9.5
	あまり思わない	20 100.0	3 15.0	4 20.0	2 10.0	5 25.0	1 5.0	2 10.0	3 15.0
	全く思わない	3 100.0	- -	- -	1 33.3	- -	- -	1 33.3	1 33.3
	無回答	6 100.0	- -	2 33.3	- -	- -	- -	- -	4 66.7

資料　音更町における地産地消率に関する調査報告書

3　農業の「稼ぐ力」

十勝平野の中央部に位置する音更町は、大規模畑作地域であり総土地面積の52%を農地が占めている。隣接する帯広市のベッドタウン化によって、近年まで人口は増加基調にあった。地域農業の特徴としては、小麦、小豆や人参が市町村別生産量において全国１位であり、他にもブロッコリーやながいも等の生産量も道内トップクラスである。広大な耕地を背景とした土地利用型農業は、地域外から所得を稼ぐ音更町の基盤産業として位置づけられている。

地域経済の成長にとって重要なことは、第一に基盤産業としての農業がどれくらい稼ぐ力があり、雇用吸収力があるのかという点と、第二に地域外で獲得された所得がどれくらい地域内で循環しているかという点である。第一の点については、畑作農業は規模拡大を通じた生産性の高い大規模経営を追求し、都府県と比べても競争力は高い。しかし、雇用吸収力という面では労働生産性の上昇により余剰労働力が発生する。第二の点については、獲得された所得の多くは、地域内で消費する機会が少ないことから地域外に流出しており、域内の所得循環構造や産業間の波及効果が弱いことを指摘できる。

しかし、地域住民の町内産農産物の購買意欲と産直市場の拡大は高い相関関係が認められる（第１表）。このことは、地域外で稼ぐ基盤産業としての農業に加えて、集約型農業を形成することによって地場産野菜や農産物加工の面で雇用を創出しつつ、地域内でも「稼ぐ力」をもつ多様な基盤産業の育成につながる可能性を示唆している。

4　需要が先か、供給が先か？

経済基盤モデルは、需要そのものが外生的に与えられており、供給面での基盤産業のあり方に重点が置かれる。しかし、実際の地域経済は、供給によって需要が喚起される側面と需要によって供給が生み出される側面との組み合わせによって成立している。これまで大規模畑作地域は、農業の「稼ぐ力」を主として域外需要に求めてきた。しかし、今後は域外から所得を稼ぐ農業と同時に域内需要向けのローカルな産業活動としての農業に目を向けていくことが、「稼ぐ力」の強化と地域経済の成長にとって重要となるであろう。

（ささき　とおる）